

浄土

monthly JODO

2014
May

5



2014
表紙のひと

花写



芝崎純子

撮影 Keizo S.

ヨーロッパフラワー連盟講師資格を取得し、
2007年から東京・港区白金台の自宅でフラワーサロンを主宰。
生花、プリザーブドフラワー・アーティフィシャルフラワーなど
ヨーロッパスタイルを基本のLesson開催のかたわら、
フラワーギフトアレンジを提案。

特に、仏事の供花を扱うブランド【花写】を立ち上げ、
生花に特殊な加工をして長期保存できる
プリザーブドフラワーの仏花ギフトアレンジに定評がある。
墓石用のアーティフィシャルフラワーのアレンジ等

仏壇の供花は、

一人暮らしで水替えが大変という年配の方々からも人気で、
手元供養で小さな花のアレンジを添えるのは、毎日の供養の際、
遺された方の心に穏やかさ優しさを与える、という。

法事やお盆、お彼岸など、また、お悔やみのフラワーギフトとして
注文も多く、いま各界注目のアーティストである。

花写 <http://www.ca-sha.net>

●今月号は浅井竜介氏の花器を使ったアレンジです。

陶芸家●浅井竜介Webサイト<http://mocakoo.blogspot.com/>

浄土

2014/5月号 目次

新連載 法然上人のお言葉	梶村 昇 英訳 河西良治	2
被災地の現場から②	藤田文亮	4
会いたい人 矢野誠一さん (下)	関 容子	10
響流十方	林田康順	20
新連載 蓮門句会		24
連載小説 渡辺海旭	前田和男	26
友好の絆	森 清鑑	34
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙・表紙裏=2014『浄土』表紙の人 【花写】芝崎純子

背表紙裏=茶雲の美味探訪



表紙題字=中村康隆元浄土門主

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

で法語

2 唐土^{もろこし}わが朝^{ちゆう}に、もろもろの智者^{ちゆう}達の沙汰^{さた}し申さるる觀念の念にもあらず。また學問をして念の心を悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極樂のために、南無阿彌陀仏と申して、うたがひなく往生するぞと思ひ取りて申す外^{ほか}には別の仔細^{さいしゆ}候^{こう}わす。ただし三心四修^{さんしんしゆ}と申すことの候^{こう}うは、皆決定^{みなけつぎよう}して南無阿彌陀仏にて往生するぞと思ううちにこもり候^{こう}うなり（一枚起請文）。

現代語訳——（私、法然の申している念仏は）唐や日本におられるたくさんの方の智慧のある僧が、いろいろ申される「觀念の念仏」でもなく、また學問をして、念の心を「悟つて申す念仏」でもない。ただ極樂に往生するには、南無阿彌陀仏と申して、疑いなく往生すると思ひ定めて称えるほかに別の仔細はない。

ただ三つの心構えと四つの修行とが必要とされているが、それはみんな南無阿彌陀仏と申して往生すると思ひ定める中に、おのずから具わってくるものである。

Honen Shonin's Sayings

Nembutsu, i.e., invocation of Amida Buddha, I (= Honen) preach is neither "idealistic nembutsu" which was advocated in so many ways by so many intelligent priests in China and Japan nor "enlightened nembutsu" which was invoked after having learned and grasped the essence of nembutsu. The only necessary thing for going to Amida's Paradise is that people call the name of Amida Buddha by reciting "Namu Amida Butsu" while they are firmly determined to believe the undoubted attainment of their birth to the paradise. There is nothing else to do but this reciting.

Although it is said that "three mental states" and "four practices" are necessary for it, people come to possess all these things naturally while they make up their mind to recite "Namu Amida Butsu" and go to the paradise. (from *Ichimai Kishomon*)

解説

これは「二枚起請文」の前半分です。後半分は次号の予定です。「二枚起請文」というのは、全文でも二八五文字という短いものです。ここには上人の教えが凝縮されております。

念仏といえは、私たちは、口に南無阿弥陀仏と称えることと思っておりますが、それは法然仏教から始まったことで、それまでの念仏は「観念の念仏」「悟りの念仏」ということでした。「観念の念仏」とは、心を静めて仏の姿を想い描くということであり、「悟りの念仏」とは、学問をして念仏の意味合いを悟ることです。それらは素晴らしいことですが、いつも心が静まらず、悟りなどとは縁の遠い衆生にできることではありません。

上人は、念ずるとは、声に出して称えることであるということを経典や先人の論著によつて明らかにし、阿弥陀仏の本願は、南無阿弥陀仏と称えるものを浄土に迎えとると誓われたものであると示しました。称名念仏の始まりです。

「三心」とは、真心、深く信ずる心、浄土に往生したいと願う心という三つの心であり、「四修」とは、恭しく、ひまなく、いつも、ながい間修行するという四つの修行のことですが、そういう分析は他に任せるとして、上人は他の箇所でも「源空（法然の名）の目には」「それらはみんな「南無阿弥陀仏なり」（「聖光上人伝説の詞」と述べております。

Commentary

This passage is the first half of *Ichimai kishomon*. The latter half will be taken up in our next issue. *Ichimai kishomon*, which literally means "one sheet of a written vow", is very short, consisting of only 285 characters in total. Nevertheless, Honen's teachings are condensed into it.

The mention of nembutsu reminds us at the present time of reciting "Namu Amida Butsu" orally, but such a form of nembutsu originated from Honen's Buddhism. Until then, nembutsu had meant an "idealistic" or "enlightened" one. "An idealistic nembutsu" indicated visualizing Buddha's figure in a tranquilized mind, and "an enlightened nembutsu", learning and realizing the meaning of nembutsu. These forms of nembutsu were indeed magnificent, but could not be put into practice by ordinary people who were always disturbed in their minds and had little prospect of gaining any enlightenment.

By investigating the Buddhist scriptures and his predecessors' articles, Honen made it clear that nembutsu consisted in reciting "Namu Amida Butsu" by mouth. He also demonstrated that what Amida Butsu had originally vowed was the oath that He would welcome into His Pure Land those who recited "Namu Amida Butsu".

"Three mental states" mentioned above indicate these three hearts: a true heart, deep religious faith and an aspiration for birth into the Pure Land. "Four practices" refer to deferential, incessant, habitual and prolonged ones. Although I would like to leave the analysis of these matters in the hands of other researchers, Honen stated in some other work (*Shoko Shonin Densetsu no Kotoba*) that all of these "were Namu Amida Butsu" to "Genku's (Honen's name) eyes."

梶村昇

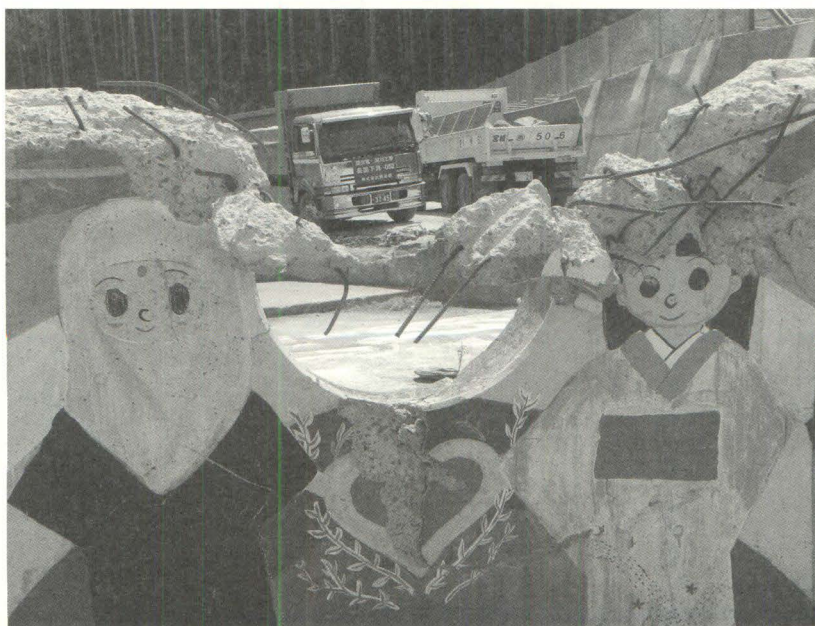
亜細亜大学名誉教授

被災地の現場から

2

藤田 文亮

毎日新聞
京都支局
(前仙台支局)



津波で壊れた、大川小学校の校庭にあったステージの壁。卒業生が描いた世界各国の子供の姿の向こうに、復旧作業のトラックが行き交う＝宮城県石巻市で2013年4月29日撮影

2011年3月11日。東日本大震災が始まった日、四国・松山支局でデスクをしていた私は、多くの人と同じように、テレビ画面に映し出される津波の生中継映像に、言葉を失った。次の一文は、その際に書いたコラムだ。

「記者稼業も20年近く。少々のことには驚かないつもりだった。しかし、甘かった。現場に行ってもないのに、心の震えが止まらない▼見渡す限りの倒壊家屋、ギョウギョウ詰めの避難所、遺族のまなざし……。阪神大震災の取材を思い出す。しかし、その経験が無意味に感じてしまうほどの凶暴な映像に、ぼうぜんとする。防災や原発の専門家ですら「想定外」と繰り返し、赤子のように立ちすくんでいる▼自分に何ができるのか。神戸で、被災者からかけてもらった言葉を紹介したい。『復興には膨大な時間がかかる。今は無力と感ずても、被災地を忘れず、力を付け、将来、役に立ってほしい』。

1年あまりが経った12年4月、前述の神戸の被災者の言葉を思い出しながら、仙台支局に赴任した。それから1年半、日々被災者と向き合う若い支局員と一緒に、被災の現場と、自らの力不足とに相対しながらのデスク生活を送った。感じたこと、お伝えしたいことはたくさんある。

■深まる思慕

まず、愛する人を亡くした方々の思慕の思い。

かつてここに何があったか、まったく想像がつかない。三陸沿岸に延々と続く、とてつもなく広くぼっかりと空虚な空間。宮城県山元町の自動車学校跡地もその一つ。10メートルを超える津波で、生徒や職員ら計36人が帰らなかった。

更地にボツンと小さな祭壇が据えられ、震災の月命日である毎月11日、夫婦が3本の缶コーヒーを持って訪れている。勤務していた娘（当時27歳）は行方不明のまま。好物だったブラックコーヒーの缶を開け、「来たよ」「今日はあんまり寒くないね」と、そこに娘がいるかのように語らう。ひとしきり語らった後、海岸線を歩いて手がかりを探し続けている。

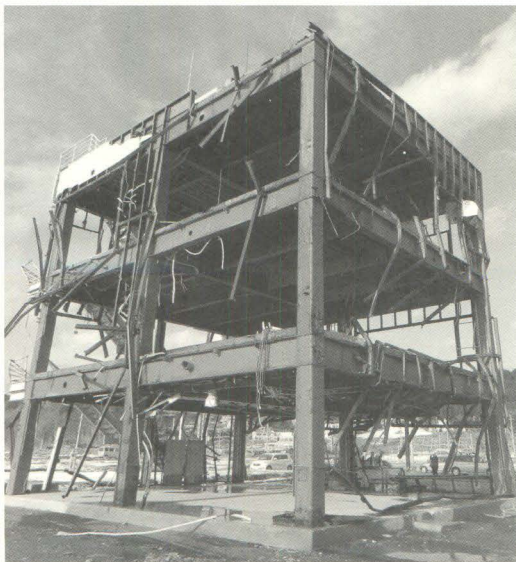
仙台支局で同僚だった女性記者は、ずっと夫婦の取材が続けている。娘さんと同年代のこの女性記者に、ご両親はさまざまな思い出話を語ってくれた。「いつ帰ってきてもいいように」と、娘の部屋はあの日のまま。部屋に掛けられたコートは、母親が頬（ほ）を毎日擦りつけているため、白い袖が薄黒くなってしまったが、洗濯できないでいる。

そしてある月の11日、「あなたの分」と、4本目の缶コーヒーが女性記者に差し出された。ご両親の思いの丈が詰まった彼女の報告はいつも、涙ながらだった。

■「がれき」が映す社会

「がれき」とよばれた震災廃棄物も、さまざまなことを考えさせてくれた。

宮城、岩手の両県だけで2000万トンを超えるとされ、自治体の処理能力を大きく超



壁はすべて流され、鉄骨までひしゃげた南三陸町の防災対策庁舎。屋上を越える津波に襲われ、町職員や避難した住民ら42人が犠牲になった＝宮城県南三陸町で2012年3月3日撮影

えた。あまりの量に国は、全国の市町村に受け入れ可否を聞いた。11年4月には572市町村が「可能」と回答したが、10月調査では48にまで激減した。放射能汚染の懸念が、全国に広がった結果だ。

京都の風物詩「五山送り火」で被災地の松を使うか否か。放射能汚染を心配する母親らの声に、「被災者の心を踏みにじった」「やはり京都は『一見さんお断り』か」との声が浴びせられた。被災者と京都市民、双方が傷ついた。

「灰を子供が吸い込み内部被ばくしたら」との母親の不安を「過剰」と断じ、「冷静な対応を」としたり顔に述べる筋にくみすることはできない。

その一方で、被災地で積み上げられた「がれき」について、「これ、全部、私たちのうちだったの」と教えてくれた、がれきの山の前を毎日通る宮城県女川町の小学生2年生の女の子の泣きそうな表情も忘れられない。

私たち日本人は、水俣病やカネミ油症などで、痛切で大きな犠牲を払って未知の汚染物質に対する予防原則を学んだはず。原発事故で発生した汚染土壌、増え続ける汚染水、全国54基の原発の使用済み核燃料。誰が、何を、誰に押し付けようとしているのか。原発問題をはじめとして、震災は、立ち止まって考えなければならぬ課題が無数にあることを、私たちに気付かせてくれた。

■広がる心情の格差

それから、年月を経るほどに広がっていく、被災者の間での心情の格差。

同じ「遺族」と呼ばれる方々の中でも、感じている思いは、当然ながら異なる。前号で

触れた、全校児童の7割の74人が犠牲になった宮城県石巻市立大川小学校。残された子供をこれからも守っていかねばならない親と、子供をすべて亡くした親とおのずから気持ちは異なる。ある父親は、「うちは、みんな津波に持って行かれた。守る者も何もない。同じ子供を亡くした親と言っても、どうしても、フツとした時に、意識の差を感じてしまう時もあるんです」とさみしそうに語った。

遺族はもちろん、「うちは誰も亡くしてないからいたしたことない」と多くを語らない被災者の心情は、更に多様だ。そんな被災者の気持ちを受け止めようと、被災地では傾聴活動が取り組まれている。京都の僧侶にも、被災地に通い、自らも被災しているボランティアらと、仮設住宅の集会所などに出て来ることが難しい方を中心に一軒一軒ノックしている方がいる。

深い苦悩を抱えた人は、批判はもちろんアドバイスでも、その気配を感じただけで感情を閉じてしまう。ただひたすら「聴く」に徹することが、誰にも分かってもらえないと心の奥底に沈んで固まっている感情を少しでも表に出すきっかけになりうるといふ。被災者の問題は一人一人違っており、支援者がその苦悩を「分かる」ことは困難。でも、困難だという前提に立って分かろうとする姿勢で関われば、心が通じることがあるという。

その僧侶は、「月日がたち、被災者の苦悩はますます多様化し、心理的格差は広がって



積み上げられた「がれき」。これらはみな、震災前までの、普通に生活していた人々の営みの結晶だった＝宮城県石巻市で2012年7月14日撮影

います。だからこそ一人一人の苦悩を大切に受け止め、安心してそのままの感情を吐露できる時間を提供したいと思います」と、活動を継続していく大切さを話してくれた。

■ハチドリの一滴

南米の先住民に伝わる「ハチドリの一滴（ひとしずく）」という物語がある。燃えさかる森の火事に、小さなくちばしで一滴ずつ水を運ぶハチドリ。一目散に逃げる森の動物たちは、「そんなことして何になる」と笑う。ハチドリは静かに言う。「私は、私にできることをしているだけ」。インドの仏典にも、キジが羽に浸したわずかな水を運び続けるという同様の話があるという。時代の新旧を問わず、洋の東西を問わず、われわれ人間は、さやかな「ハチドリ」をたたえてきた。

仙台支局勤務時代、「何をやっていいかわからない。だから、それを見付けたい」と被災地を訪れてくれる友人が何人かいた。ある友人は、息子を亡くした母親の前にして立ちすくんでしまった。そのとき、その母親は「息子のことも、生き残った私たちのことも、忘れないでくれるだけでもありがたいんです」と優しく言ってくれた。救われたような表情になった友人は「必ず、また来ます」と力を込めた。彼はきつと、自分にできる一滴を探し当てるだろう。私は、できるだけ多くの人に、被災地に足を運んでほしいと思っている。「単なる興味本位でも、物見遊山でもかまわないから、ここで現実を見てほしい」と語る被災者は多い。遠慮することはないのだと思う。そこで何かを感じて、想像力を働かせ、自分にできる「一滴」について考えてほしい。

私たちは、微力だが、無力ではない。そう信じたい。

(了)

連載

会いたい人 関 容子



矢野誠一

さん

下

撮影／タカオカ邦彦

矢野さんに私が心底あこがれるのは、今もってCDの売れ行きが落ちないという伝説の嘶家古今亭志ん生とじかに接していること、多くの人々を感動させたその大津絵節「冬の夜に」を何度も聞いていること、また私が大好きだった志ん朝の前座（朝太）時代から矢野さんはナマで聞き、つきあってもいること、などによる。

夏目漱石は『三四郎』の中で、小さん（三代目）と「時を同じうして生きてゐる我々は大変な仕合せである。今から少し前に生まれても小さんは聞けない。少し後れても同様だ」と主人公の与次郎に言わせているが、矢野さんはこれを受けて、

「この、どんな名人でも、上手でも、その藝人と『時を同じうして生き』ないことには、それに出会うことができないというのは、なかなか含蓄のある言葉である。いい藝、すぐれた藝にふれるのは、出会い以外のなものでもないのだ。自分の感受性の、いまよりず

っと鋭かったはずの青春時代に、古今亭志ん生と出会うことができたことは、『大変な仕合せ』だった。」（『志ん生のいる風景』）

と書いているが、今どきの女子風に言えば、まことに「ぐやじうい!!」。でもまあ私は十五代目羽左衛門を一度、六代目菊五郎を何度か観ているから（矢野さんは観てないそうだが）仕方がないか、とあきらめるしかない。

「僕が精選落語会のプロデュースをしたころはちょうど志ん生さんは病気で高座を休んでた。昭和三十六年の暮れに、巨人軍の優勝祝賀会の余興に招かれて、そこで脳溢血で倒れたんだからね。高輪のプリンスホテルだった。しかし翌年には復帰してね、新宿末広亭の緞帳をいったん下げて、弟子に抱えられて座布団に座って、講釈師の使う釈台を前に置いて『替り目』を一席演った。右半身が不自由になって、多少言語障害もあったんで、以前よりゆつくりした口調になったのがかえって芸が一段深くなったようで、お客は落語を

浴衣姿で司会をする矢野さん。十数年前頃。



聞きながら涙するという、不思議な現象が起つてね」

そしてその翌年の暮れ、今度は精選落語会のレギュラーの一人、三笑亭可楽が病気になる。この落語会は年六回、偶数月に開かれるので、さっそく来年二月の出演を頼みに志ん生宅を訪ねることにした。

「志ん生さんのうちは文京区の団子坂下にあつて、あらかじめ長女的美津子さんをお願いしてはあつたけど、居間に通されると、長火鉢を脇に炬燵^{こたつ}におさまった志ん生さんが毛糸の正ちゃん帽^{しょうちゃんぼうし}というのをかぶつてね（笑）、いかにも好々爺然としてただにこにこ笑つてた。その後何度か訪ねて、夏でも何でも火のない掘炬燵におさまつてましたよ。とにかく出演が決つたときは嬉しかったね。だって僕が一番好きな落語家は、古今亭志ん生なんだから」

炬燵におさまる老噺家はまさにこれ『志ん生のいる風景』。いかにも俳句のうまい矢野さんらしい題名だ。

さて、昭和三十九年二月に開催された第十二回精選落語会。この出演者と演目がすごい。『野ざらし』談志、『ちきり伊勢屋』正蔵（彦六）、『二十四孝』小さん、『六どろ』文楽、『真景累ヶ淵より宗悦殺し』円生、そしてトリがおめあての『品川心中』志ん生……とい

う落語好き垂涎の番組だった。

「僕は可楽という人もとても好きだったんだけど、次回四月の第十三回に出たのを最後に、八月には癌で亡くなってしまうんです。でも、その後も志ん生さんが毎回出てくれたおかげで、そのころ全盛だったホール落語会の中で最も格調の高い会、という評価を得た。いつも大入り満員で、空前の落語ブームがここでピークに達したわけなんです。

そして志ん生さんの最後の高座となるのが第四十回の精選落語会。演し物は『二階ぞめき』で、これは本来志ん生の十八番なんです。毎晩吉原に出かけてひやかして歩かないと気がすまないという若旦那のために、番頭が店の二階に吉原をこしらえて遊ばせるというおかしな噺なんだけど、これがどういうわけか、その晩は途中から『王子の狐』になってしまった（笑）。袖に控えていた美津子さんが屏風の陰にまわって、お父ちゃん、違うよ、違うよ、って声をかけるんだけど、とう

とうそのまま最後まで通してしまった。そんなことがあって間もなくのこと、美津子さんから電話があつて、次回の十二月から少し志ん生を休ませてもらえないか、ということ。結局十二月は長男の金原亭馬生が代演した。それでこの会を最後に、七年間続いた精選落語会は終了、ということになるんです」

志ん生はその後高座を遠ざかつて、五年間も生きた。矢野さんはどうしてあの電話のとき、「無理をしてもどうか出てください」と说得しなかったんだろう、とずっと悔んでいるという。

志ん生の「冬の夜に」は是非とも一度聞いてみたかった。それというのは、この「大津絵」の替歌を愛してやまなかったという高名な経済学者、そして東宮（今上天皇）御教育係りを長年つとめた小泉信三氏が、これを聞くたびに落涙したという逸話があまりに有名だったから。その歌詞がとてもいい。

冬の夜に風が吹く 知らせの半鐘がジャン
と鳴りや これぞ女房わらじ出せ 刺子襦
袢に火事頭巾 四十八組おいおいに お掛
け衆の下知を受け 出て行きや女房そのあ
とで うがい手洗に身ときよめ 今宵うら
のひとに怪我のないよう 南無妙法蓮華經
清正公菩薩 ありやりやんりゅうとの掛け
声で勇みゆく ほんにおまえばままならぬ
もしもこの子が男の子なら おまえの商売
させやせぬぞえ 罪じゃもの

ところで矢野さんと私は年に一回、タウン誌「銀座百点」の句会で顔を合せるが、そのメンバーに小泉先生の次女小泉タエさんがおられるので、先日久々に三人でこの話になった。小泉邸に招かれた志ん生が「冬の夜に」を披露する段になると、「父はきちんと白いハンカチを膝に置いて泣く準備をするの（笑）。母も姉も私も、泣くのは父にまかせて

ました」とのことだった。

「小泉さんが亡くなったのが昭和四十一年の五月。その直後に志ん生が人形町の末広で独演会を開いて、番外に先生をしのいで『冬の夜に』を歌ったんです。これを聞いた安藤鶴夫さんが感激して楽屋へ行ってみると、志ん生が壁に背をもたせかけて手放しで泣いてた。安鶴さんも泣きながら、大津絵であんまり先生を泣かせたからその罰で、今度は自分が泣かされるんだよ、って言ったら、そうだそうだ、とくしゃくしゃな顔でうなずいたんだって（笑）。

多分そのときのことを安鶴さんが書いたものを、山口瞳さんが読んだらしくて、どうしても志ん生の大津絵を聞きたい、と言い出して、その相談を僕は江國滋を通して受けたんです。さっそく美津子さんに話して、出演料は十万円。この中には師匠を抱きかかえるお弟子二人と三味線の人のお礼が含まれてる。場所は明神下の鰻の神田川、時間帯は昼、と

いうことにした。これ、精選落語会の出演料が一人一律一万円だったから、十万円というのはかなりの額で、あの時分に原稿料で十万円もらうには大変だったんだけど、山口さんの熱意を先方に伝えて特別に安くしてもらおう、というのもかえって山口さんの本意ではなからう、と思ったわけなんです」

山口瞳はのちに「(十万円は) 私にとつて容易な金ではなく、これは一世一代の贅沢だと思った。金額だけのことを言っているのではない」と記している。

それにしてもこの会の御相伴にあずかった矢野さんも江國滋氏もすごいラッキーだった。実は私もずっと以前に、志ん朝さんをお座敷に招いて噺を聞くには友だち十人、一人五万円できないだろうかと一世一代の贅沢を夢見たことがあったのだが、実現に至らなかった。早く矢野さんに相談すればよかった。「この神田川のお座敷からまた一年後、昭和四十三年五月に銀座のヤマハホールでNHK

が落語会を開くんですが、このときも志ん生さんが小泉先生の三回忌ということで『冬の夜に』を歌うんです。しかしこれはあの神田川のとくと比べてぐんと落ちてしまっていて、僕にはただ一人の老人が覇気もなくボソボソと俗曲を歌っている、という寂しい風景にうつった。なんだか志ん生が遠くへ行ってしまったような気がしてね。このときが僕が客席で志ん生を見た最後になるんです」

志ん生が亡くなるのは昭和四十八年の九月だが、それまでの約五年の間に、矢野さんは何度か無聊をかこっていた志ん生を訪ねている。

「雑誌『演劇界』で取材を頼まれて、歌舞伎について語ってもらいに行ったりするけど、すぐに落語の話ばかりになる(笑)。そんなとき裏に住んでいる長男の馬生がスケッチブックを片手に兵児帯をだらしなく巻きつけた姿でひょっこり現れて、あとで一杯ね、という仕草を僕に向かってして、二階へ上が

って行つたんです。間もなくあわてて降りてきて、二階の鐘爐様の軸、どしたの？ 模写をしとこうと思つて、つて言つたら、志ん生がケロッとして、売っちゃったよ、つて。そしたら馬生が腰を抜かさんばかりにびっくりしてね（笑）。ひえつ、だつてあれ、（川合）玉堂だぜつ、つて。がっかりするのを尻目にこつちに向かつて、俺は昔つから物売の、うめえんだよ、つて、小声で言つたりしてね」

病人だからお金の使い道はないはずなのに、手元に小金を置いておくことの心強さのために、道具屋を呼んではうまく物を売るところと自体に志ん生は喜びを見出していたのだろう、と矢野さんは見ている。

何かにつけて貧乏くじばかり引いて暗い感じの馬生に対して、弟の志ん朝の存在は最初からまぶしかった。

「僕が初めて志ん朝の朝太時代を聞いたのは、父親に弟子入りして半年にもならないころだったけど、そのうまさには舌をまいた。

明るくていきのいい口調が本寸法で、十何年もキヤリアの差のある兄貴よりずっといい噺家になりそうなのが誰の目にもはつきりして、僕は親しくしてた馬生のために複雑な思いだったですよ」

まだ前座の身が上野本牧亭で二か月に一度、「古今亭朝太の会」を開いて、毎回二席ずつネタおろしをしたという。私がここに一度も行つてない、というのは一生の不覚に思える。

「才能のある若い噺家が二か月間みっちり稽古すれば、これだけうまくなる、という驚きをこの会は与えてくれた。何十年もいろんな舞台にふれてきて、毎度毎度客席でゾクゾクさせられたのはこのときと、今の海老蔵の新之助時代に出会うまで、なかったよね。それで朝太は入門わずか五年で志ん朝を襲名して真打になるんです。若冠二十四歳だった。しかし僕の見たところ、朝太時代の若さにまかせてぐいぐい攻めまくるような迫力と輝き

は、さすがに失せていたような気がするね」

矢野さんのように、こうして長い長い時間をかけて一人一人の芸と人生を見つめ続ける存在は貴重だと思う。

いつかも、先代小さんが脳梗塞を患ったあとにボソボソと語るようになってからの高座に味わいが増した、と矢野さんが言うのを聞いたときもそう思った。

「ああ、今一番落ちてるのはお客の質かもしれないね。歌舞伎やまともな芝居はつまらなくなるし、今どきの若者芝居だと、やたら笑うしね」

矢野さんの近著『さようなら昭和の名人名優たち』（日経新聞出版）は、文楽・志ん生から森繁久弥・小沢昭一に至る名人・名優五十九人への追悼文を集めたもの。主として新聞社の求めに応じて短時間で書き上げているのに、これだけ中味があるということは、日ごろの蓄積がいかに豊かであるかを思い知ら

される。視線はいつもあたたく、読後に切ない余情が漂う。

つまり矢野さんが生前の多くの人から愛されているので、こんな文章が書けるわけだ。

「まあ、僕が中学時代にまともに勉強して堅^{かた}気になっていたら、あんまり面白くない人生だったかもしれないね」

と矢野さんは笑うが、「堅気」でないなら「遊び人」ということか。それなら私も同様だ。

噂に聞く矢野さんの結婚式、その出席者の顔ぶれの豪華なことと言っただけ。

「僕が三十のときだからね、市ヶ谷の私学会館で会費制でささやかにやるつもりだったけど、司会が小畠さんから談志になりたての談志で、若い噺家たちがいっぱい集った。声をかけてないのに来たのが、先代林家三平と月の家円鏡、それに作家の色川武大さんまで来てくれた」

色川武大は矢野さんよりも六つ先輩。学校

昭和56年、色川武大さん（左）と対談する矢野さん。
『写真提供 文藝春秋』



嫌いで、若いころはかつぎ屋、闇屋、街頭の立ち売り、博徒など、アウトローの生活を転々とするところがいかにも矢野さんのあこがれそうな人物だ。『なつかしい芸人たち』『寄席放浪記』などの著作は矢野さんのジャンルと重なる。

「浅草のことだとか色川さんに訊ねると、その抜群の記憶力にいつも驚かされた。日の当てる芸人にはあまり関心がなくて、ちよつとうらぶれたような人たちをこよなく愛した人ですね。その時分、俺は競輪で食ってるんだとか、理想の死に方は野垂れ死にだとか、かつこいいことをうそぶいてた。落魄願望のある人なんだな、とそんな点も尊敬してたかな」

色川さんは六十歳を一期として心臓破裂という劇的な亡くなり方をした。一方、矢野さんはと言えば、もう少しまともな遊び人。読売演劇大賞を初め、数々の演劇賞の選考委員をつとめ、英国製のグレーのソフトにローゼンシュトックの薄めのサングラス、パーバリのコートと、いつもダンディな姿で元気に劇場から夜の酒場へと巡回する。

錚々たる顔ぶれで名高い東京やなぎ句会。宗匠格の入船亭扇橋がまだ柳家さん八だった

ころ（昭和四十四年）に発足したから「やなぎ句会」なのだそうだが、今年でもう四十五年になる。その創立メンバーは、小沢昭一、江國滋、桂米朝、柳家小三治、大西信行、永六輔、三田純市、永井啓夫、それに矢野さんだが、その俳号が落語『船徳』の道楽者の若旦那から取った「徳三郎」なのもおかしい。私は年一回の銀座百点の句会に招かれるだけの素人だが、この会のレギュラーでもあるプロ級の小沢昭一さんと矢野さんの句を必ず選句してしまう。

その中からいかにも矢野さん、という私の好きな句は、

夏めくや鳶の女房は小走りに
黒パンにチーズの夜食老楽師

そしてつい先日のお花見句会では、なんと矢野さんが一等賞だった（私は四等）。

私が選句した矢野さんの句、

家刀自は花の噂に眉をひき
ブランコや陽水拓郎さだまさし

ほかのメンバーがたくさん採った句、

轉りや子なき夫婦は手をつなぎ
ここからは隣の町のさくらかな

そして、すぐに矢野さんとわかった句は、

雛の間に長火鉢ある鳶の家

何かにつけて鳶が出てくるのは、大好きだった志ん生の「冬の夜に」の世界が矢野さんの中によっぽど深く根づいていいるからだろう。

（この項のおわり）

響流十方
こころるじっぽう

上品を願う事は我が身のためにはあらず、かの国に生まれ已りて還りて疾く衆生を化せんがためなり。これあに仏の御意に契わざらんや。

(法然上人『三部経釈』)

上品の位での浄土往生を願う事は、決して自分自身のためではありません。極楽浄土に往生した後、一刻も早く、この娑婆世界に還り来て、一人でも多くの人々に浄土往生を促し、お念仏の教えを伝え広めんがためなのです。このように上品の往生を願うことが、どうして阿弥陀さまの御心に適わないことなどありません。しょうか、いや、必ず適うものなのです。

上品な生活を目指して——「上品往生は手を引くべからず」——

去る一月二八日、理化学研究所の研究ユニットリーダー・小保方晴子さんが、外からの刺激で体細胞を初期化することにより、すべての生体組織と胎盤組織に分化できる多能性を持った細胞（STAP細胞）を作製する方法を世界で初めて確立したと発表し、大きな反響を呼びました。筆者自身、ここ十数年にわたり、大学で生命倫理の入門講座を担当していることから、その画期的な成果にいたく感銘し、四月からの講義に備えて、新聞の切り抜き作業に勤しんでいました。加えて、小保方さんが若き研究者であったことから、大学院生達に向け、「どうぞ皆さんも、頑張つて研究に取り組み、その分野こそ異なれ、小保方さんのような素晴らしい論文を執筆して下さい」などと発破を掛けていました。

ところが、発表から程なくすると、その研究論文にさまざまな疑問が投げかけられました。そして、三月三一日に公表された、理化学研究所理事長に提出された調査報告書には「二つの点について小保方氏に研究不正行為があったという結論に達した。研究不正は科学の本質を歪め、研究という行為そのものだけでなく研究者コミュニティに対する一般社会からの信頼を大きく損ねるものである」と記載されるに至りました。小保方さんは、この報告書には到底承伏できないと主張しています。今後の動向は予断を許しませんし、素人判断

を避けるべきことは承知しているつもりです。しかし、前述したように、とても感動していた私にとって、一連の騒動は、何とも残念なことでした。まだまだ推移を見守らないとわからない事です、多くの人々を落胆させることになつてしまいました。

『観無量寿經』の中に「九品」という説示があります。釈尊が、散乱する心を抑えがたい者達の浄土往生の様相を九通りの階位を通じて説かれた一節です。上品・中品・下品という三種をさらに上生・中生・下生に分けて、上品上生から下品下生までの九階位があり、往生人の氣質、種々の行業、来迎する仏・菩薩等のあり様、往生後の浄土での得益などについて、階位順に説かれていきます。これら九品に該当する人々を解釈するにあたり、善導大師は、「上品の三人はこれ大に遇える凡夫、中品の三人はこれ小に遇える凡夫、下品の三人はこれ悪に遇える凡夫なり（上品に往生する人は大乘仏教の教えに巡り合うことができた凡夫です。中品に往生する人は小乗仏教の教えに巡りあった凡夫です。下品に往生する人は悪しき縁にしか巡り合うことができなかった凡夫です）」（『観經疏』）と明示になり、人々の仏教との出会いの相違によって九品は配当されているに過ぎず、いずれも凡夫に他ならない（九品皆凡）と主張されま

した。言い換えれば、上品の者とは、世のため、人のためになることを常に念頭にした生活を送っている凡夫を、中品の者とは、自分のことで精一杯な生活を送っている凡夫を、下品の者とは、他人に迷惑をかけてしまうような生活を送っている凡夫を指しています。こうした理解が、次第に「あの人は上品な方」^{じょうひん}、「あいつは下品なやつだ」^{げひん}などと表現されるようになっていきます。

なるほど、善導大師がお示しのように、私達は煩惱具足の凡夫に過ぎず、自己の力で煩惱を断ち、覺りを開くことなど到底不可能な存在です。ですから、阿弥陀さまによる救いの働きを頼りにお念仏を称え、まずはお浄土に往生し、そこで覺りの境地を目指すのです。とはいえ、凡夫の自覺を失わずにお念仏に励み、阿弥陀さまの光明に照らされている自己に気づけば、阿弥陀さまやお浄土に先立たれた大切な方々に喜んでいただけるよう、私達の振る舞いはおのずと律せられ、次第に下品から中品へ、さらには上品な生活へと誘われる結果となるのです。もちろん、冒頭のご法語のように、上品の往生を目指すのは、自分一人の覺りを目指すためではなく、一人でも多くの方々をお浄土に導くために他なりません。この一節に続けて法然上人は「上品往生は手を引くべからず」と、私達に上品の往生を目指すべきことを強く訴えておられるのです。（林田康順）

蓮

門

句

会

勝崎裕彦

(東京新宿・香蓮寺)

大空へ施餓鬼如来の幡遊ぶ
施餓鬼棚飲食虚空へ遍満す
雲間より五月の光来迎会

山崎龍道

(天草熊本・遣迎寺)

施餓鬼幡揺らす雨呼ぶ風とかも
施餓鬼船出てゆく海の藍濃かり
施餓鬼棚へ住持の紫衣尊かり

テーマ 《施餓鬼》

行正明弘

(福岡糸島・正覚寺)

島中の蜚^がが総出の船施餓鬼

施餓鬼会座沙弥の法衣の寸足らず

オンタラター施餓鬼の僧の早陀羅尼

佐山哲郎

(東京根岸・西念寺)

書き終へし卒塔婆あまた麦の秋

本堂に五つ首振る扇風機

お導師の大の字に寝る夏座敷

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

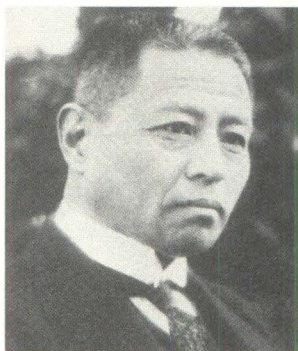
前田和男

第五十回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

碧眼の比丘、ニヤーナティロカ その9



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は、小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。そんななか、ヨーロッパ初の比丘が誕生したと知り強い関心を覚える。法名は三界の智者を意味するニャーナティロカ。しかし、すでに彼は、海旭と行き違いに、南伝仏教の聖地セイロン（現スリランカ）に渡って修行中。爾来十六年、碧眼比丘が来日、ついに二人に邂逅の時が訪れた。所は海旭が帰国して住職をつとめる深川は西光寺。すでに海旭は日本を代表する社会派和尚。ニャーナティロカは国際仏教界の泰斗となっていた。碧眼比丘が作曲家志望からビルマで比丘となる経緯を話した後、それぞれの救貧活動を語りあったところで、海旭は碧眼比丘の虜囚生活に話題を転じた。

インド独立運動の 闘士を支援

こうして碧眼比丘ニャーナティロカは、足かけ三年にわたる虜囚暮らしを語り終えた。しばし二人の間に沈黙がたゆたった。渡辺海旭は碧眼比丘の物語を胸中で反芻した。反芻すればするほどに数奇にして波乱万丈な顛末（てんまつ）に驚きと感動を禁じ得なかった。そのいっぽうで、難行苦行のドラマ性もさることながら、このドラマで碧眼比丘が果たした僧侶らしからぬ俠氣の役回りが、どこか自分に似ていると共感を覚えた。その感情は、その後の碧眼比丘との「釈放後」をめぐるやりとりで、ますます募った。海旭は沈黙をやぶって訊ねた。「恩赦となっても即故国には戻らなかったのはなぜですか」

碧眼比丘は居住まいをただすと答えた。「仏教徒としての自分の原点であるセイロンに戻って、今ふたたび修行と研究に打ち込み

たいと念じたからです。実は恩赦の前にセイロン総督に、収容所でもいいからセイロンに戻りたいと手紙を書きましたが、懺^{いんげん}懺^{ぶれい}無礼に断られました。まあ当然でしょう。セイロンはお隣のインドとともにイギリスの支配下にある。そのイギリスとわが故国ドイツは戦闘状態なのですから」

海旭は身を乗り出すと訊いた。「しかし、当面はセイロンで仏教を極めることがかなわないなら、どうされようと……」

「だったらかねてからの夢であった、今なお仏教が生きている日本を訪ねたいと」碧眼比丘は改めて海旭の顔を見つめた。「その伝手をたどっていたところ、逗留先のホノルルの日本の寺で、貴僧をたずねよと紹介されたのです。しかし、それは世界情勢が許さなかった」

碧眼比丘が配慮から遠回しな言いぶりをしているのに気付いて、海旭は単刀直入に代弁した。

「英国と同盟関係にある日本にとって、貴僧の母国ドイツは敵対国。その敵国へおいそれと行くわけにはいかない。そんなことをしたらまた収容所へ送られるかもしれませんから」海旭は碧眼比丘の真意を代弁しながら、居心地の悪さを感じてならなかった。

四年におよぶこの大戦は、たしかに「世界的」ではあったが、主たる戦場はヨーロッパであった。極東にあった日本はいわば「局外者」であり、日英同盟を理由にドイツに参戦、「空家」となったアジアで漁夫の利を得ることになった。中国におけるドイツの拠点であった青島を占領、太平洋の広大な制海権を握るドイツ領南洋諸島もやすやすと手に入れた。海旭にとってドイツは、足かけ十一年、多くの果実を与えてもらった大恩ある国だけに、日本の火事場泥棒に近いふるまいには内心^{じくじ}忤^こたる想いがあった。

そんな海旭の心中を察したのか、逆に碧眼比丘から慰撫^{いぶ}の言葉がかけられた。

「いまでも日本と英国は同盟関係にある。それが国是ですが、貴僧は違う。私のような『招かれざる客』をこうして快くお招きいただいたことがその証しで、心より感謝しています」ここで碧眼比丘は語氣をつよめた。「ところで、インド独立の闘士を支援されているとか。その経緯をお聞かせいただけませんか。おそらく、貴僧の中では、それと私の招聘とはつながっていると思われそうです」

「へいかに」と海旭は内心で呟いた。まさに凶星だった。今度は海旭が語り役、碧眼比丘が聞き役になる番だった。

海旭が支援をしているインド独立の闘士とは、インドの宗主国の英国人総督を襲撃して日本に亡命しているラス・ビハリ・ボースとその一党のことである。

「それには、頭山満とうやまみつるといういささかコワモテの大人物が月下氷人の役を果たしておりまして：」と海旭は切り出すと、インド独立運動を支援するにいたる経緯を縷々語りはじめた。

孫文の庇護者でもある 行動派右翼との交り

玄洋社を率いる「行動派右翼」の巨魁、頭山満との最初の出会いは、大正二年（一九一三）、国士舘大学を創立するにあたって「創立発起人」になったことであつた（写真参照）。かねてから、海旭が「我が国教育界の情勢は欧米の模倣教育に墮し、文部省等もまた形式完備にのみ齷齪あくせくして日本人たる独自の教育を忘れ、教育の教育あつて人間の教育なし」と嘆じているのを、芝中学の門下生である柴田徳次郎が受け止めて、「だったら先生、自分たちで大学をつくりましょう」と言うので、しかるべき発起人をあつめる仲介役を引き受けたのだった。

まず声をかけたのは、当代一の実業家の渋沢栄一だった。渋沢に了解をもらうと、その渋沢から国士舘の設立趣旨を体現する人物がいると紹介されたのが頭山満だった。身長五



写真・大正5年6月3日国士館にて。

(前列向かって右から)

徳富蘇峰

渋沢栄一

野田卯太郎

頭山満

(後列同)

柴田梵天

渡辺海旭

尺七寸、体重十八貫のがっしりした体躯に、顎に鬚をたくわえ、鋭い眼光が相手を射る。世間の評判どおりのコワモテだったが、何度か会合を重ねるうちに、頭山が語る「興亜論」に海旭は共感をおぼえた。

いわく、「興亜とは、何よりも西欧列強のアジアに対する植民地侵略から、アジア諸国を解放することだ」は実に明快だった。とりわけ海旭をなるほど納得させたのは、海旭の愛読書でもある大塩平八郎の『洗心洞箚記』

を援用してこう説明されたときだ。「真にアジア共存の大義からシナを助けるというのであれば、たとえシナが日本の厚意に対して忘恩の行為あるとするも、我は我だけの心を尽したものとして愚痴はいわぬものじゃ。愚痴をいう了見では、初めから他の世話をする資格などない」

これが機縁で、頭山満との付き合いができたが、それは、二年後の大正四年（一九一五）にさらに太いものになる。インド独立運動の志士、ラス・ビハリ・ボースらが当地の英国人総督を襲撃、すでに日本に亡命中の孫文をたよって来日したのである。孫文が紹介したのは、自らの庇護者で大アジア主義を提唱する頭山満だった。ところが半年もしないうちに国外退去命令がでると、頭山は頭山の信奉者である新宿中村屋の相馬愛蔵・黒光夫妻に匿^{かくま}ってもらう。やがて当局の追及もいくらかゆるむなか、海旭も、頭山の紹介でボースと親交を結ぶことになった。ボースもしばしば、

西光寺へお忍びでやってきた。海旭は弟子たちが心配するのを制して本堂へ上げて、しばらく歓談をしたあと、何がしかの支援金を渡して帰したものだった。

ボースを仲間で匿い支援するための頭山の理屈、「ボースはアジア人である。日本人もアジア人である」が簡潔にして想いがこもっていて、海旭は大いに気に入った。そして、ボースを匿って三年、ボースは頭山の肝いりで、相馬愛蔵・黒光夫妻の長女・俊子と結婚。海旭らの支援をうけ、日本にあってインド独立運動をつづけていまに至っている。

碧眼比丘を 国際梁山泊の一員に

ここまでじつと耳を傾けていた碧眼比丘だったが、やおら海旭の顔を見据えると、今までにない強い口調で話した。

「いやいや、頭山満という人物もすごいが、貴僧はそれ以上だ。貴僧は学問研究でも救貧

活動でも社会的に高く評価をされている。それをすべて失うかもしれないのに、イギリスと同盟関係にある日本政府に衝突こうとしている」。碧眼比丘はここで一拍おくと、そういう語気を強めてつづけた。「しかし、目の前に困った人がいたら助けるといふ純粋な宗教的な行為であっても、当局はそうはとらない。ましてや列強が合従連衡しながら対峙している現下の時局にあつてはなおさらだ。それはこの私の抑留生活が証明している。私が三年にわたつて虜囚の辱めをうけなければならなかったのも、私の純粋な宗教的動機からでた活動が「反英的」ととられたからだ。逮捕の一年前シッキムに仏教のルーツを求めて出かけたが、イギリスにとつて当地が地政学上重要なこともあつてスパイ活動と疑われた。また、さきほどお話をしたセイロンのアウトカーストへの支援も、もともと反社会的な存在である彼らをたきつけようとしているのではないかと疑われた。幸い、イギリスにもいる

仏教徒たちの支援もあつて恩赦を得られたが、彼らはまだ私のことを疑っているだろう。したがつて、貴僧にも危害が及ばぬとも限らない。これ以上の恩義はご無用にしたい。きたい」

やはりこの男は僧侶らしからぬ「俠気きうきの人」だ、どこか自分に似ていると、海旭は再確認した。

「いやいや、こちらこそ、そんなお氣遣いはご無用に願いたい。ぜひとも、しばらく逗留されて、拙僧のささやかな活動の一翼を支えていただきたい」

海旭はそういうと、心中でこんなことを思い、ある決断を下したのだった。

碧眼比丘の話は実に示唆に富んでいる。

ヨーロッパ発の仏教が、単に研究だけでなく、これほどまでにアジアで生き生きと実践されていることには驚かされた。その背景には、欧米列強をまきこんだ国際政治との厳しい葛藤があることもよく分かった。

十数年前のドイツ留学時代がまざまざと甦ってきた。あれから世界の事情はずいぶんと変質・変容した。往時はまだまだ宗教は政治や社会から距離を置いて、宗教家は宗教の世界にこもっていればよかった。しかし、いまや宗教は政治から超然としていられる時代ではない。海旭が身上とする生活即宗教。その生活に政治は深くかかわっている。したがって生活即宗教を実践しようとすれば、政治にもかかわらねばならぬ。

それにはいま目の前に鎮座している碧眼比丘が必ずや力になってくれるはずだ。この男には自分と同じ「俠氣」があると確信した。ぜひとも、しばらく日本にいてもらおう。そうだ、宗教大学で教鞭をとってもらい、ポーラスや頭山満にも紹介しよう。寝食はわが西光寺でしていただく、大切な寄宿者として。

これまでに西光寺に身をよせ相談に訪れた人々は、僧侶や仏教研究者だけではなかった。洋の東西を超えて実に多士済々。インド独立

運動の志士ラス・ビハリ・ボースや前駐日ドイツ大使ヴィルヘルム・ゾルフ、駐日英国大使チャールズ・エリオット、ソルボンヌ大学教授レシユアン・レヴィイブリュール、第一高等学校教授ベッツオルト、ロシアの漢字研究者のオットー・ローゼンベルク、実業家で書画家としても知られ孫文の辛亥革命の援助者でもある王一亭らなど。いつしか、国際テンプル、国際梁山泊と呼ばれるようになっていた。

窓に目をやると、東の空はすでに白みはじめていた。

よし、「智燈」ことニャーナティロカに、本日からわが国際テンプル・国際梁山泊の新メンバーに加わってもらおう。海旭は心中でそう決断すると、大きくうなずき、碧眼比丘に微笑みかけた。

（この項おわり）

御宿とメキシコを結びつけたもの

友好の絆

第一回

森清鑑

遭難

烈風が吹き荒れ、山のような波が襲い、船は木の葉のように弄ばれていた。漆黒の闇に雷光が光り、恐怖に満ちた船員の顔を浮かび上がらせた。風の唸り声が不気味に静寂の闇に木霊したかと思うと突き刺すような豪雨が船体を打ちつけた。大きなガレオン船（外洋帆船）の三本マストの帆は当然すでにたたんである。しかし、太いマストがむちのようになっっている。ここは一体どこなのだ。船員達には皆目分らない。今から四百年前の一六〇九年九月三十日の夜のことである。

このガレオン船の名はサン・フランシスコ号。今のフィリピン、ルソン島カピテ港を出港し、太平洋を北へ向かい偏西風に乗って太平洋を横断し、メキシコ、アカプルコに着港する予定であった。大航海時代。フィリピンもメキシコもスペイン領でヌエバ・エスパニアと呼ばれ、一五一九年から一八二一年ま

で北アメリカ大陸、カリブ海、太平洋、アジアに跨がるスペイン帝国の副王領地。その首都はメキシコシティであった。

七月二十五日、サン・フランシスコ号、サン・アントニオ号、サンタ・アナ号の三隻は、フィリピン、カピテ港を出港。しばらく晴天が続き、極めて順調な航海であったが、八月十日より、日本の遙か南を北に向かい始めた、ラドラン諸島近辺で、台風に遭遇し、それから行き先を完全に失い、六百七十トンの大船ガレオン船といえども、動力船ではないから、なすすべもなく翻弄されていた。

船員はほとんどスペイン人で、彼らはいずれも幾度も太平洋横断の経験がある屈強な船乗りであった。しかし、今はただ恐怖にののくばかり。そしてこの船にはフィリピンの臨時総督長官の任期を終え、ヌエバ・エスパニアの首都メキシコシティに帰国するドン・ロドリゴが乗船していた。彼は聡明で公正な人格者。スペイン本国の陛下の信任篤く、

ヌエバ・エスパニアに派遣されていたのである。一瞬彼は後悔した。三月出航の予定が書類手続きの遅れで七月まで足止めされたことを、艦隊司令官が七十歳の高齢で不安視していたことを、それに航海用の海図が酷く間違っていたことを。

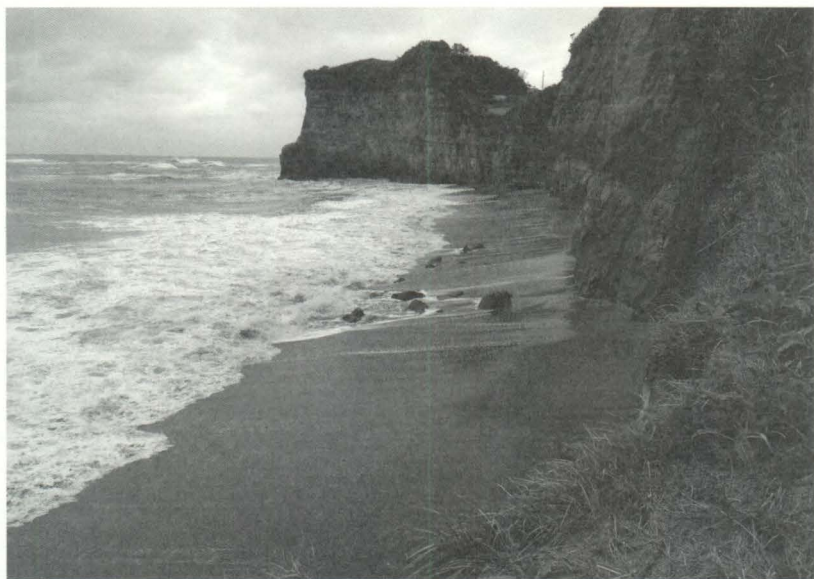
とにかくどこにいろのか分からない。太平洋のただ中だろう。とにかく暗くて何も見えない。外を見る余裕もない。どこか島に漂着してくれば。いや、そんな幸運は万に一つもあるまい。船は、途方もなく高い波に持ち上げられ、谷に突き落とされるように落下。強風で船は傾き、海に引きずり込まれる。船は断末魔の軋みきしみを上げている。このままばらばらになるのか。怒号に混ざって祈りの声が聞こえる。

とその瞬間、轟音と共に船が突然止まり、みんな吹っ飛んでいろいろなところに身体をぶつける。海に放り出された人もいるに違いない。ロドリゴも壁まではじき飛ばされ、い

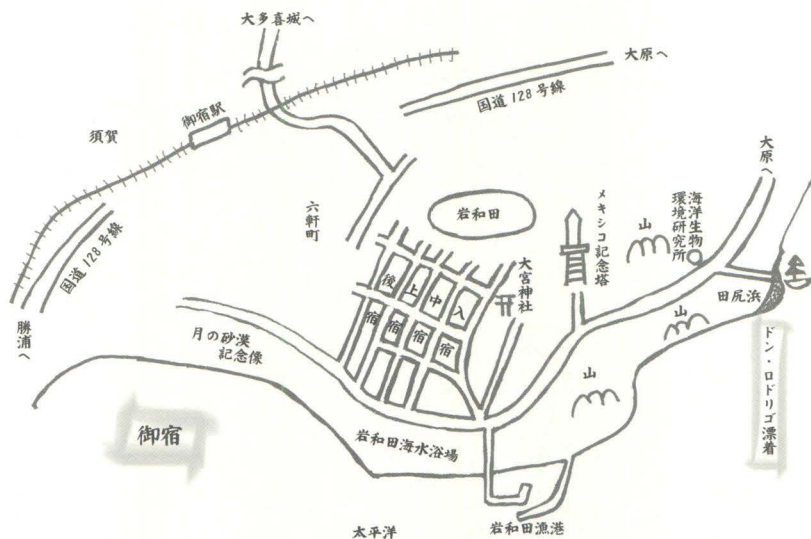
やというほど身体を打ちつけた。気がつくとき足下に多量の海水が流れ込んでいる。座礁だ。船体は砕け散る寸前である。船は傾き、壊れ、数人の船員が暗闇の波に投げ出される。甲板をころげ、手に触るものがなんであれ、しがみつ、阿鼻叫喚あびきょうかんの声があちこちで起こる。

ロドリゴも海に投げ出され、死を覚悟したが運良く、沈んだ身体が浮いたところに船の破片が流れてきてしがみつ。いつもは勇敢な者達だが、今は、帆船や縄にすがり、祈りを捧げ、死を待つ状態。

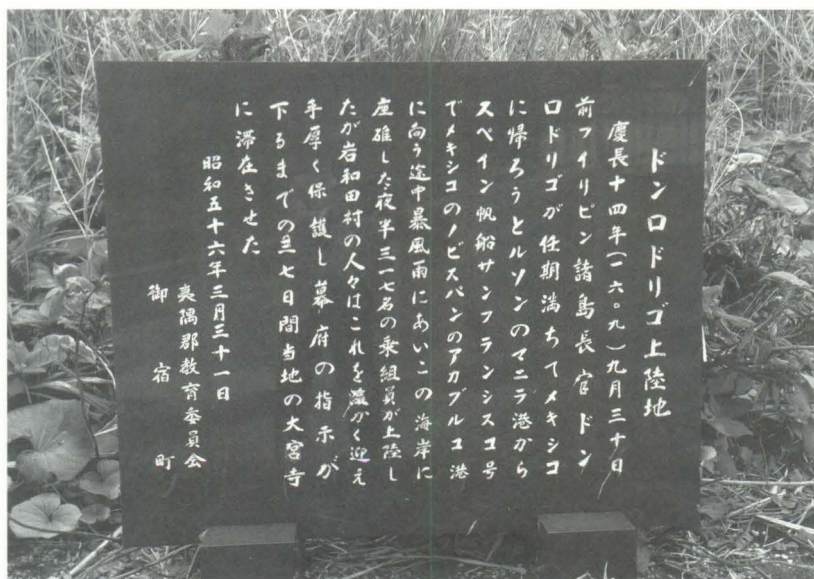
そうこうしている間に、夜が少しずつ明けてきた。前を見ると、ぼうっと陸地のような陰が見える。ロドリゴは、何という奇跡だと思つた。大声を上げ、船の破片にしがみついている船員を励ましきながら、陸地を目指せと泳ぐ。ある者は、傷だらけになりながら、また、ある者は、瀕死の者を抱えながら、破片と共に浜に流れつく。ロドリゴは直属の部下アントンの姿を見つける。



ドン・ロドリゴ遭難地：千葉県御宿町岩和田尻海岸



御宿、岩和田遭難地と御宿地図：御宿町観光協会資料館：右下が田尻海岸



「ドン・ロドリゴ上陸の地」

ドンロドリゴ上陸地

慶長十四年（一六〇九）九月三十日
前フイリピン諸島長官ドン
ロドリゴが任期満ちてメキシコ
に帰ろうとルソンのイニラ港から
スベイン帆船サンフランシスコ号
でメキシコのノビスパンのアカプルコ港
に向う途中暴風雨にあいこの海岸に
座礁した夜半三二七名の乗組員が上陸し
たが岩和田村の人々はこれを温かく迎え
手厚く保護し幕府の指示が
下るまでの三七日間当地の大宮寺
に滞在させた

昭和五十六年三月三十一日

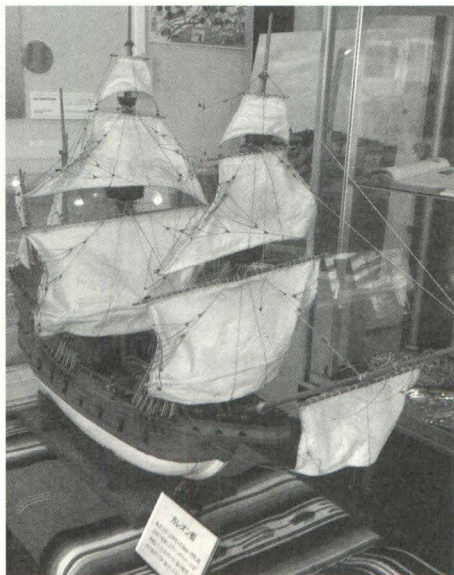
真鍋郡教育委員会
御宿町

「総督無事でしたか」

彼はあちこちの岩場にぶつかり傷だらけであつたがともかく元気そうである。そうこうしているうちに大勢のけが人が浜にたどり着きゼイゼイ息を切らしている。けが人を背負ってくる者もいる。

そこは狭い砂浜が連綿と続き、その背後には高い岸壁が連なっている。沖を見ると、壊れた船が岩礁に揺れている。船には二百万ドゥカドの財産が積み込まれていた。ロドリゴの財産も積んである。しかし、彼は、そんなものはもうどうでも良かった。一番大切な命という財産を得て、神に感謝した。しかし、ここがどこだか分からない。無人島なのか、太平洋のどこかの島なのか。しかし、ともかく陸地にたどり着いた。

アントンは生存者の人数を確認する。船に乗っていた者、三百七十三名。浜には二百名近くが確認できたが、皆、身一つである。のちのちの結果からすれば、そのうち56名は波



帆船サン・フランシスコ号模型：御宿町歴史民俗資料館

にさらわれたか、死亡。浜にいる者も衰弱が激しい。

ロドリゴは、すぐにここがどの島なのかを含め、ともかく辺りを調べるよう比較的元気そうな二人に命じる。しばらくすると、「稲田を発見しました」との報告が入る。すると今度は、丸裸同然の自分達が襲われでも

したら、ひとたまりもないという不安がよぎった。そうこうしているうちに「日本人が現れました」との報告が入る。五、六人の日本人がやってきて、身振り手振りできかに同情と哀惜の態度を示している。ロドリゴは船に同乗していた日本人を思い出し、彼を呼び寄せた。この日本人はヌエバ・エスパリーニャに帰化し、共にメキシコに行くことになっていたのである。彼にここがどこかと尋ねさせると「日本のユバンダ（岩和田）」だということが分かった。

ロドリゴは、それを聞いた途端、再び神に感謝した。なんと幸運にも日本に漂着したのか。ロドリゴは、日本人をよく知っていた。ヌエバ・エスパリーニャで、複数の日本人が暴動の罪で逮捕され、処刑されることを、彼が再調査してみると、日本人側に正当な事実があることを発見。ただちに彼等を釈放し、船と金銭を与え、日本に帰国させたことがあった。そして大御所（徳川家康）より感謝状

を受け取っていたからである。

一六〇九年九月三十日、嵐で漂流、難破。奇跡的に、たどり着いた処が、幸運にも日本の、上総国夷隅郡岩和田の田尻海岸であったとは。

この遭難事故が、後々の日本とメキシコの特別、親密で友情に溢れた友好関係の始まりであり、友好の絆に発展していくのである。しかし、浜にあえぐ人々の誰が、このことを想像し得たであろうか？

【参考資料】

在日メキシコ大使館「条約から条約へ」黒田関係史ノート

「ドン・ロドリゴの日本見聞録」安藤操 意訳・解説

たにぐち書店

「ドン・ロドリゴの幸運」日本・メキシコ交流の始まり

小倉昭・作、山口まさよし・絵 汐文社

「ドン・ロドリゴ物語」金井英一郎書 新人物往来社

「インタビュ」先・清酒「岩の井」醸造元 岩瀬酒造株式会社代表

岩瀬能和、ふるさと文化研究会理事長 安藤操

講師

佐々木 閑

「仏教の基本思想

—— 釈尊から大乘へ」

ささき しずか

花園大学文学部教授 文学博士

1956年生まれ。京都大学工学部工業化学科及び文学部哲学科仏教学専攻卒業。

京都大学大学院博士課程満期退学。米国カルフォルニア大学バークレイ校留学。

専門は仏教哲学、古代インド仏教学、仏教史。

日本印度学仏教学会賞、鈴木学術財団特別賞受賞。毎年二回、東京にて「科学

と仏教の接点」をテーマとする科学者とのトークセッションを開催中。

主な著書『インド仏教変移論なぜ仏教は多様化したのか』（大蔵出版）『犀の角

たち』（大蔵出版）『日々は修行』（筑摩書房）『生物学者と仏教学者七つの対論』

（共著）『律に学ぶ生き方の智慧』（新潮選書）

会場 大本山増上寺慈雲閣

東京都港区芝公園4-7-4

地下鉄都営三田線『芝公園』徒歩2分

地下鉄都営浅草線・大江戸線『大門』徒歩7分

JR『浜松町』徒歩10分

平成26年6月27日(金)

午後3時より4時半まで

会費一般 1,000円

(当会会員無料)

申し込み 会員、一般ともに不要（先着150名）

お問い合わせ先

— 法然上人鑽仰会 —

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

電話 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

主催 法然上人鑽仰会

後援 浄土宗総合研究所



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●風

〔特選〕
風花やきょう人妻となる娘

鈴木真理子

娘の結婚式の日である。とうとう自分から離れて行くという思いは、複雑に違いない。折から風花がちらほら舞って来たが、娘はそして作者は、どのような気持ちで眺めているのだろう。季語の取り合わせもよい。

〔佳作〕春一番風林火山の地

斉田 仁

古里の明るき風に初音かな

石原 新

雨東風や地下街へ人押し込みぬ

浜口 佳春

●習

〔特選〕
春彼岸習い始めの陶絵皿

早乙女喜栄子

絵皿とあるから装飾用として焼いたものだろうか。広く皿一般として、食器も含めるのだろうか。習い始めて少し格好がついてくる

と、部屋に飾り、あるいはそれで食べたくなるのだろう。使うのによい彼岸である。

〈佳作〉

雛の宵姉が指南の習い事

當間あさ子

春陰や手習いの手に添える指

井口 吾郎

筆太の習字を吊し新学期

井村 善也

●自由題

〈特選〉

伊勢湾にすとなと幕や霾ぐもり

増田 信子

黄砂は年々ひどくなっているようである。

中国では暖房にも今だに石炭を使っているとかで、その煙も混ざったのが、遠慮会釈もなくやってくる。まるで幕がすとなと降りたように、対岸も見えないのである。

〈佳作〉

雪折れの桜なまなましく匂う

横山富美子

新のりの香り味わう手巻き寿司

山口 信子

薄氷を踏む音たのし通学児

東 保



坂雲自由題

兼題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会〈編集部選〉

■風

雛流す川に来ており風の神
梅園を走り抜けたたり風の神
東風吹くや見知らぬ人も会釈する
東風吹けど寒の戻りか道凍てて
桜東風エビスビールの泡溢る
春の日を風になるまで遊びけり
隙間にて細くなりたる春の風
いかのぼり風土記の丘の空真青
駅に咲く一人静の風雅かな

■習

早起きは習慣となり春迎う

佐藤雅子
早乙女喜栄子
當間あさ子
森 懷人
小林苑を
袖岡恭子
工藤 掉
飯田義彦
水口悦郎
佐藤雅子

締切・二〇一四年五月二十日

発表・『浄土』二〇一四年七月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-17-14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

老たけて尚手習い苦吟のみ
つくしんぼつんと女子学習院
梅月夜おとなのための習字塾
げんげ田のひろがり漢字練習帳
お習字を孫と一緒に雛の日
手習いの手の冷えており梅の昼
如月の義母に習いしちらし寿司
春の雪一時間目が習字なり
手習いのように飯炊く父長閑

■自由題

幽玄の世界となりし雪野原
百歳や涙の雫母の雛
黄水仙いや突き抜けりアスファルト
慎重に登るきざはし忘れ雪
夕暮れはいつか来るものしやばん玉
東京の灯りに降って春の雪
階段のせまくて春の雑居ビル
柿ビーのビーがこぼれる冬座敷
仏縁の四温日和となりけり
味消えてチューインガムの余寒かな
スパニッシュオムレツ春の日々のよう
梅の夜のかくまで白き土ふまず

佐藤雅子
飯島英徳
早乙女喜栄子
當間あさ子
内藤隼人
袖岡恭子
村田遼子
斉田 仁
相田啓二
雪野文雄
西原規夫
柳 月彦



かい目

さっちゃんね

かまち♡ひろう



かまちひろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



編集後記

風が右へ右へと流れる卯浪かな 岱潤

最近葬儀に行くとき、葬儀社の人からよく言われることがある。「初七日は葬儀の法要の中でしてもらえますか」。どうしてですか？と聴くと、「皆さんそうしています」とか、「火葬場でお食事をし、収骨が終わったならその場で解散になりますので」とか言われてしまう。

私は僧侶に成り立ての頃、七日という時間の経過をとっても重要と考え、「親戚など呼ばなくてもいい、お骨上げの法要もしますから、初七日はその日にお宅に伺います」と頑固に行っていた。しかしその日が葬儀の翌日であったり、喪主の

疲労を思い、お骨上げ法要を『繰り上げ初七日』とすることに妥協してきた。それが、葬儀の中で終わらせろという。確かに先日四会場が並んでいる葬祭場に行ったとき、お骨上げの後初七日をしているのは私だけだった。僧侶は皆お釜に入ったところで退散していた。これでは法話をする時間が全く無くなってしまふ。参列している人たちが、最も聴く気持ちになっているときに、法話をしないのは、仏教の自殺行為とも言えそうだ。

葬祭会館のシステムがそのようになっていけるのなら、骨上げ後の法要は不可能になってしまった。だからといって初七日を葬儀の中でする意味など全くないの

ではないだろうか。それは葬儀とお別れの短縮になるだけだ。そんなことをするよりも、葬儀をしつかりやり、食事の時に法話をさせていただくこと、それがせめてもの抵抗だ。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十巻五月号 頒価六千円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年四月二十日

発行 平成二十六年五月一日

発行人

編集人

印刷所

〒一〇五〇〇一一

東京港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・六九四七

振替 〇〇一八・〇八・八二八七

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
肱博之(網代・寛安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

泰雲の

文と写真

美味探訪

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年



“美濃忠”の『初かつを』 尾張名古屋

『目に青葉 山ホトトギス 初鯉』という素堂の初夏の句。

初夏の菓子に相応しい尾張名古屋の老舗・“美濃忠”さんの『初かつを』をご紹介します。

尾張名古屋は、老舗の菓匠が多いことで有名です。その中でも代表格ともいえる美濃忠さんは、尾張藩主徳川義直公が名古屋城入府の際、駿河の国より同道し尾張藩御用の菓子屋を勤めた桔梗屋の流をくんでいます。上質な葛を贅沢に使った『初かつを』は、季節限定（2月上旬～5月下旬）の“美濃忠”創業以来の伝統菓の一つ。淡桃色に初かつおをモチーフした美しい縞模様の品の良い棹菓子。食感は外郎^{ういろう}のようですが、実は蒸し羊羹。上品な口当たりに、気をつけないと1棹食べてしまいそうな口福な味を、みなさんに特別にご紹介します。

頑なに名古屋から出ませんが、東京・日本橋の高島屋本店（銘菓百選売場、木曜日）・新宿高島屋（金曜日）、三越本店（菓遊庵売場、火・金曜日）で曜日限定で販売されています。『初かつを』とならんで『上がり羊羹』も逸品で大ファンです。

『初かつを』（消費期限4日）1棹税込2,376円



美濃忠本店 愛知県名古屋市中区丸の内1-5-31 ☎052-231-3904

営業時間 9:00～18:00 定休日 年中無休（元旦除く）

檀溪通店 名古屋市昭和区檀溪通4-13-1 ☎052-853-3151

平和公園店 名古屋市千種区猫洞通2-22 ☎052-783-6121

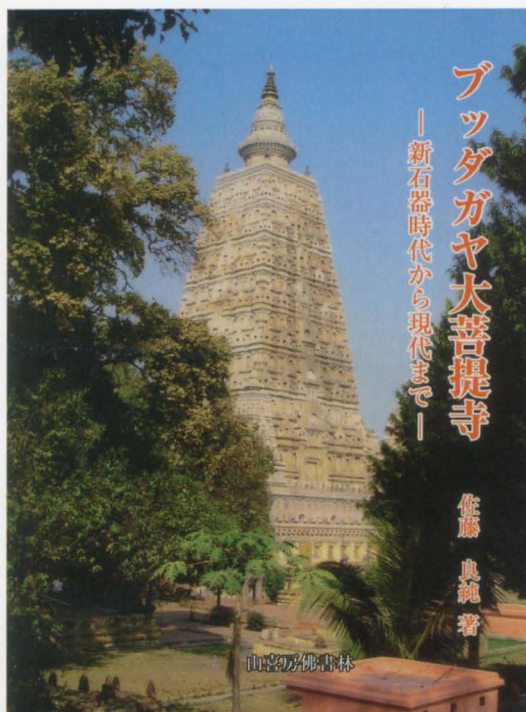
待望の書、刊行なる！

ブツダガヤ 大菩提寺

佐藤良純 著

ブツダガヤ大菩提寺
—新石器時代から現代まで—

佐藤 良純 著



ブツダガヤの歴史
全貌が明らかに！

山喜房佛書林

本体2000円